

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

外科研修報告記

自衛隊中央病院外科

鈴木 崇文

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修制度により、2026年1月12日から1月23日までの2週間、がん研有明病院食道外科にて国内研修の機会を賜りました。まず、このような大変貴重な機会をあたえてくださいました、日本臨床外科学会の万代恭嗣前会長、国土典宏会長ならびに国内外科研修委員会の高山忠利前委員長に深く御礼申し上げます。そして、快く研修を受け入れていただいた、がん研有明病院食道外科の渡邊雅之先生をはじめとする先生方、また日常業務で大変忙しいにもかかわらず、親切にいろいろと教えてくださったレジデントの先生方にも大変感謝申し上げます。

今回、私がかん研有明病院食道外科での研修を希望した理由は、自施設にて数例、食道癌手術執刀の機会をいただき、その難しさを再認識したことがきっかけです。これまで“何となく”理解したつもりでいた食道癌手術ですが、重要臓器に囲まれた食道の執刀医を目指すにあたって、改めて勉強し直す必要があると考え、そのきっかけとして全国屈指のハイボリュームセンターであり、多数の手術手技解説に関する発信をされているがん研有明病院食道外科での研修を希望いたしました。

初日に、金森 淳先生に同心円状モデルをコンセプトとした手術手技を中心としたレクチャーを行っていただきました。今まで、学会やWebセミナーで拝聴していたものの、正直全く理解できておりませんでした。その後、実際に正確かつ迅速な手術手技を見学させていただくことで、食道癌手術を行うにあたり必要な解剖学的知識、手術コンセプトへの理解が深まったと感じています。渡邊雅之先生の胸腔鏡下での症例も見学させていただきましたが、澁みなく進む手技は美しく、Webの手術動画からは得られない生きた知識となったように思います。また、山岸胃管やロボット支援下のIvor-Lewis、食道胃管バイパスなど、これまで私が経験したことのない手術手技を見学、手技のコツをご教示いただき、大変勉強になりました。郭清、吻合から、腸瘻固定に至るまで、根治性と患者の術後QOLが考え抜かれた、コンセプトに基づいた、妥協のない手術が行われており、技術だけでなく、献身性のようなものを感じた次第です。また、術後フォローもスタッフの先生方とレジデントの先生方が毎日緊密に連絡されている姿が大変印象的でした。また他施設とのWeb研究会では、同世代レジデントの先生が食道手術におけるERASを多方面から検討した研究内容を報告されており、大変興味深く拝聴させていただきました。

食道外科の手術がない日には、胃外科の手術も快く見学させていただきました。腹腔鏡下手術において、私と同じ左手であるにも関わらず、展開される視野の違いに衝撃を受けました。展開された適切な剥離層を基に行われる手術は、迅速かつ正確で、今後の私自身の手術手技に活かしたいと思います。

また、同世代の先生方と交流できたことも私にとって、とても良い刺激となりました。私の所属する防衛医科大学校は、後期研修医・大学院生が全員防衛医科大学校出身と、大学の特性上、他大学や他施設との交流が活発とは言えないところがあるように思います。内視鏡技術認定を取得されている同世代の先生が、食道癌手術の執刀をされている姿を目の当たりにしたり、私よりもはるかに食道癌手術を理解し、臨床に活かしている姿を垣間見ることで、自施設にいるだけでは得られない刺激を受けることができました。

最後に、本研修に私をご推薦いただいた自衛隊中央病院の神藤英二先生、東京都臨床外科学会支部の瀬戸泰之先生、横山雄一郎先生、研究科期間中にもかかわらず国内外科研修を快諾いただいた、当科の

上野秀樹教授，辻本広紀教授，研修中の業務を支えてくださいました防衛医科大学校の皆様には，この場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

